

落合直文論 (一)

片 桐 頭 智

1

落合直文は、国文学者であり、歌人であり、文章家であり、また教育者であった。ここでは、歌人としての落合直文を論じようとするわけだが、はじめに、直文の短歌、次に歌論について、順を追って詳しく述べてみたいと思う。

落合直文の短歌は、「萩之家遺稿」(明治三七年)「萩之家歌集」(明治三九年)「落合直文集」(昭和二年)に大部分収められている。特に「落合直文集」は、総決算の意図で編まれたもので、与謝野寛の跋文が、くわしくそれについて語っている。また、直文の短歌について、寛は、跋文で次のように述べている。

短歌は「萩之家歌集」全部を収録し、二十余首の新たに発見したものも補った。先生の短歌は恐らく是れ以上に見附からないであろうから、短歌のみは此集に載せたものを以て正に全集と称してよい。

順序は先生が短歌の改革を自覚せられた明治二三年頃よりの作を初

めに掲げた。「村雨日記」以下のものは概ね其れ以前の作であるが、後の作でも以前の風格に似たものは此中に収めた。読者の便宜の為に漢字を増し、また所所に傍訓を施した。

寛の跋文は、次の三点で注目を引く。第一は「落合直文集」の短歌篇は、直文短歌の全集とみなしている点である。第二は、直文の短歌編纂に、一つの評価が加わっている点である。つまり、制作年代順に整理されていなし、また、年度別が不明のまま記載されていることである。第三は、寛自らの手によって、漢字に書きかえられ、傍訓が施され、直文原作のままの表記ではないという点である。

まず、第一の点から論じていかなければならぬ。そのまえに、直文の短歌の数を参考に掲げておこう。発行年代順に並べると、直文の短歌作品数は次のようになる。

「萩之家遺稿」 二二三首

「萩之家歌集」 一〇六一首

「落合直文集」

一〇八八首

寛が述べているとおり「落合直文集」は「萩之家歌集」全部の作品を収めているし、さらに新らしく発見した短歌二七首を増補している。

「萩之家歌集」と「落合直文集」の短歌を校合すると、それはまちがいない。しかし「落合直文集」は、その前の「萩之家遺稿」二三三首を全部収録したであろうか。両者を校合すると疑問が出てくる。恐らく「萩之家歌集」と「萩之家遺稿」の短歌には異同がないと見て、「萩之家歌集」を「落合直文集」に全部収録することをもって十分と見なしたのではないか。「萩之家歌集」にあつて「落合直文集」に欠けている歌は、疑問の歌をふくめて、次の七首となる。まず、欠けている歌を挙げてみよう。

家に古刀あり

遠つ祖にいさをし思へば劔太刀刃のかけたるもうれしかりけり

君が船を磯べに立ちて見つゝをれば袴のすそに波のよせきぬ

人の、愛子をうしなへるに

忘れたる紙鳶をばとりに独楽とりにかへりきまさむものとも思ひし

夜車のすきまの風にねざめして初雪見たり白河の関

谷水のめぐるいはほにやすらひて高崎の雲をながめつるかな

この五首は「萩之家遺稿」「萩之家歌集」にはあるが、「落合直文集」には見当たらない作品である。そうすると、直文の短歌作品数は、一〇八八首にこの五首が新らしく加わることになる。「萩之家遺稿」と「萩之家歌集」との異同は、この五首のほかさらに八首を数えるが、後述す

ることにする。さらに、疑問の歌は、同じ歌とみるべきかどうかであるが、次の二首がある。

高輪御殿にて観月の御宴をひらかせ給ひける時、よみ奉りける

いつもいつもさやかかるらむ久方の雲の上なる秋の夜の月（遺稿）

高輪御殿の観月の御宴に侍りて

ひさかたの雲の上なる御庭にはいつもさやかに月の照るらむ（直文集）

予備軍の召集にあひて

またさらにたなれの筆をうちすてゝ劔とるべき秋とはなりぬ（遺稿）

朝夕に手をば放たぬ筆捨てゝ太刀を執るべき時は来にけり（直文集）

直文は、推敲改作を多く試みているので、新旧同一作品とみるべきかも知れない。「落合直文集」には、旧作を改めた場合、それを例示しているが、この二首については、旧作を示していない点を指摘しておこう。

さて、三歌集を比較することから始めたわけだが、「落合直文集」の短歌篇は、寛のいうところの直文全歌集ではないという疑問が生じてくる。全歌集と信じて、新発見の作品を追加していく態度が、過去四十年間とられてきた。小泉芝三氏、湯本喜作氏、筆者などは、新発見史料をただ増補してきたわけである。しかし、寛にならって、落合直文全歌集を新らしく編纂し直したらどうなるのだろうかという考えが浮かんでくる。それを裏づけるものとして、次のようなこともある。

例えば、直文の「こよひの友」（明治三〇年）の一文に、門弟久保猪久吉と競詠して、「おのれ二十首ばかりは、よめり。そのうち、一つ、二つ」とある。また「従軍行」は「明治二六年の末つ方、第一高等学校

の生徒を率い、鎌倉にて発火演習を行ひける時、従軍行と云ふ題にて百首よみける中に、四十首」と記している。さらに「明星」第二号には、鉄幹の筆で、次のようなことを書いています。

落合先生が去年の冬からこの三月まで安房の海岸で詠まれた草稿をみたが、三千首以上もあるということだ、先生が歌集を公にするお考の無いのは自重すぎると思う。

このことは、大言壮語する直文とはいえ、直文の作歌量の大きさを裏づけている。直文歌集が千余首であることを見ると、それで全部の歌を網羅しているとは思えなくなるのである。

2

「落合直文集」の短歌が、全歌集でないことを、さらに検討していなければならない。ここには、「村雨日記」一三一首も収められている。「村雨日記」は、直文が伊勢から上京した明治十四年秋の紀行文である。歌文のなかの短歌であるが、それに類するものが他にもある。つまり、紀行文や随筆中の作も、すべて網羅されているかどうかを見ると、全部を収録しているとはいえない。

直文の紀行文には、他に「七日七夜」「われても末に」「明日はいつこ」があり、他に「浜の松風」「こよひの友」「根岸の里」などにも短歌が見える。

「七日七夜」は、小中村義象らと駿府旅行の七日間の日記であるが、全部直文の筆でなく、はじめは義象、五日目は合作、最後は直文と後記にしるしている。それはそれとして、この日記体の紀行文の歌は次の六

首である。

御殿場にて

久方の天をもしのぐふじのねのあかぬけしきはかくてなりけり

中御門宗行卿の墓前にて

尋ねきてむかしを忍ぶわが袖にさくら花ちるはるのゆふぐれ

冷泉為冬卿を祭れる佐野原神社にて

ふしをがむ袖もしとどにぬれにけりこやますらをのなみだなるらむ

佐野の滝にて

おちたぎつ滝の白泡こゝろあれや岩のさくらのちりもこそすれ

浮島ヶ原にて

さ夜ふけてまたも見に来む久方のつきのみふねのうきしまがはら

沼津にて

この里に住みても見ばや富士の嶺のたかきこゝろをこころにはして

最後の二首は「落合直文集」にも収められているが、前の四首は、小中村義象作かも知れない。もちろん、「落合直文集」には収められていないが「七日七夜」は「萩之家遺稿」に全文収められている。その後記によって、疑問の部に入れるべきであろう。

「われても末に」は、国府津、小田原、御殿場、興津、塔の沢、大磯の紀行文であるが、短歌一五首をふくんでいる。このうち、疑問の点もないので、歌を例示するのを省くが、一二首は「落合直文集」に記載されているが、他の三首は収められていない。その歌を示せば、

御殿場の停車場にて友人に

君は今日ひとつ車のうちに居て三たびわかれに袖しぼるらむ

国府津、蔦屋にて

文袋に文とともにふきいれておくりてましを磯のまつかぜ

日かずへて友にあひ見しうれしさににくきものさへかぞへつるかな

この三首は「落合直文集」の短歌には見当らないものである。

「明日はいづこ」は、明治二五年八、東海道をくだって、須磨、奈

良、山崎、男山、八幡宮、比叡山、嵯峨野、旧内裏などをめぐり、出発

から帰路までの長い紀行文である。そのなかの歌は、二八首を数える。

そのうち「落合直文集」に収められた歌は、一六首であって、未収録の

作品は一二首にのぼっている。それを引けば、

神戸にて

月琴の音するあたりとめくればあれしかきねにカボチャ花咲く

男山八幡宮

ふみわけぬ人は人かは八幡山神のをしへしものふの道

嵯峨野

うきよをば遠くはなれてこの夕嵯峨野のむしのこゑをきかばや

小車につなつけさせてなく蟲の嵯峨野にゆかむ日の暮れぬまに

松蟲は待ちてをあらむこほろぎはこひつつあらむくるまはやひけ

松蟲もあはれならぬにあらねどもふりすてがたしすむしのこゑ

蟲の音のしげき所にかゝりけりこゝは嵯峨野かそれかあらぬか

松蟲の声よりほかにこゑもなし琴きゝばしはあきかせのうち

郭公ほどをすごさずたづね来しこゝろを知るややどのあるじは

蟲きゝにまたおはせしか松蟲のまつかひありてまたおはせしか
あや錦身にまとふ人にきかせばやつゞれさせてふむしの鳴く音を

旧内裏

そのかみを偲びまつれば鴨川やむすばぬ袖もつゆけかりけり

「浜の松風」は、小中村義象、増田于信と共に逗子の井上梧陰の病中

見舞をし、たまたま国文学を論議した折の記録である。そのなかに、短

歌三首があるが、二首は「落合直文集」に収められている。他の一首

は、

わが君の夜の夢にやさりはなむこゝろして吹け磯のまつかぜ

「こよひの友」は、明治三〇年九月十一日、久保猪之吉の来訪を受け

て月明の夜の歌会開催の記録である。猪之吉の歌八首直文の歌五首をと

どめているが、直文の作の二首は「落合直文集」に載っている。未収録

の歌は、次の三首である。

野分して折れたる庭の萩の枝に今朝おく露は涙なりけり

照る月はこそ今宵に変わらねど父はいまさずは床にあり

月を見て月をめでにし月の歌を月の光にしるしつるかな

「根岸の里」は、遠の家主入訪問記であるが、そのなかに次の一首が

あって、「落合直文集」にはいれていない。

よその秋に迷ふあるじを恨むらむおくつゆしげし庭のしらぎく

さて、直文の歌文、日記、紀行文、随筆のなかの短歌を見てきたわけ

だが、その作品数は、総計して五八首ある。そのうち、「落合直文集」

に採られた歌数は四四首、他の二四首ははいっていない。「七日七夜」

の四首が問題あるので、直文作として明らかな二〇首が「落合直文集」に収められていないことになる。こう見てくると、直文の歌数は、前に述べた一〇八八首に五首、さらに二〇首追加されて、合計一一一三首となるのである。

3

落合直文の歌集や歌文を渉猟して整理した段階で、歌集に入れるべき作品二五首を見出したわけだが、さらに、短歌の新史料を見つける段階にはいっていかねばならない。直文の短歌は、新聞雑誌を主として丹念に当たるとなると、だいたい、次の新聞雑誌が主な対象となる。すなわち、「二六新報」「東洋新聞」「日本」「国会」から雑誌として「東洋学会雑誌」「日本文学」「美術園」「少年園」「明治会叢誌」「しがらみ草紙」「大八洲学会雑誌」(「大八洲雑誌」)「国文」「文則」「国学院雑誌」「日本主義」「この文」「歌学」「太陽」「国文学」「新小説」「新声」「姫百合」「明星」「文芸界」「わか竹」「しきしま」「国の基」「筆の花」などがある。特に「文則」「国学院雑誌」「国文学」「大八洲学会雑誌」「歌学」「しがらみ草紙」と新聞「日本」「二六新報」は、活躍の舞台となっている。三十年代になると「国文学」と「明星」が歌作発表の主な舞台である。そのほかにもあろうが、まず「明星」からみてみよう。

「明星」における落合直文の歌は、次のとおりである。

「明星」第一号(明治三三年四月)「鶴唳」一二首

「明星」第二号(明治三三年五月)「落紅」二一首

「明星」第四号(明治三三年七月)「涼扇」一〇首

「明星」第五号(明治三三年八月)「簾影」一五首

「明星」第六号(明治三三年九月)「白秋」一六首

「明星」第七号(明治三三年一〇月)「白雁」一四首

「明星」第八号(明治三三年十一月)「暮雲」七首

「明星」第一一号(明星三四年二月)「病鶴」九首

「明星」第一三三号(明治三四年七月)「初萩」八首

直文の「明星」発表の歌は、全部で一一二首となっている。これらの歌が、果してすべて「落合直文集」に収められているかと、調べてみると、収録されていない歌におつかるのである。そのまえに、「明星」発表の作と「落合直文集」の異同誤植を掲げておこう。出典を、「明星」「直文集」と記すことにする。

萩寺の萩おもしろし露の身のおくつきどころ此処と定めむ(直文集)

萩寺は萩のみおほし露の身のおくつきどころことさだめむ(明星13)

やよや子ら東鑑に載せてある道はこの道春のわか草(直文集)

いざや子ら東鑑にのせてある道はこの道はるのわか草(明星11)

波とおほく月出で初めて砂の上に君と我れとの影はうつりぬ(直文集)

海遠く月いでそめて砂の上に君とわれとの影はうつりぬ(明星7)

涼みする四条の橋に休らひて知らぬ人とも語りつるかな(直文集)

すゞみすと四条の橋にやすらひてしらぬ人ともかたりつるかな

(明星5)

移し植えし菊の若苗ねがはくは白き花のみ咲けよとぞ思ふ(直文集)

今日うえし菊の早苗おなじくはしろき花のみさけよとぞおもふ

(明星2)

かなり違った歌もあるが、同一作品とみるべきであろう。次に、「落合直文集」に未収録の「明星」の歌をみてみよう。

「明星」第一号「鶴唳」一二首のなかの一首、

うばらの花にそへて人のもとへ

わがおくる白と赤との花うばらいづれをさきに君はとるらむ

「明星」第十一号「病鶴」九首のなかの五首、

わづらへる鶴の鳥屋みてわれ立てば小雨ふりきぬ梅かをる朝

むらさきの文笥の紐のかたかたをわがのとかへて結びやらばいかに

君が母はやがてわれにも母なるよ御手とることを許させたまへ

この身もし女なりせばわがせことたのみてましを男らしき君

まどへりとみづから知りて神垣にのろひの釘をすてゝかへりぬ

「明星」第十三号「初萩」八首のなかの五首。

色あせし庭の芙蓉の下蔭に蝶死にてありわれ恋やめむ

秋風にまひし歌反故おひてきて今朝見いでたり萩のはつ花

疑はば君死にてみよ墓守となりてこの身のまこと知らせむ

君が活けし小瓶の萩のかたはらにそへても見たり撫子の花

羽破れて飛ばずなりにし笹の上の蝶ふきおとす秋のはつ風

直文が「明星」に発表した歌のなかで、一首が「落合直文集」に洩

れている。新しい作品史料一首となるわけである。こうなると、さ

らに一一一三首に一首が加算されて、直文の歌数は、一一二四首とな

る。

「明星」につづいて「国文学」(明治書院)を、明治三二年一月創刊号から三七年一二月号まで見てみよう。まず、直文の短歌数を表示しておこう。

「国文学」(明治三二年六月)「病牀雜詠」一八首

「国文学」(明治三三年四月)「歌反古」二八首

「国文学」(明治三三年六月)「歌反古」(二)二〇首

「国文学」(明治三三年七月)「庭の塵」一二首

「国文学」(明治三三年一月)「残柳」二〇首

「国文学」(明治三四年一月)「歌反古」五首

「国文学」(明治三四年三月)「歌反古」二二首

「国文学」(明治三五年四月)七首

「国文学」(明治三五年一月)「枕の塵」二七首

直文の「国文学」に発表した歌数は「明星」よりも多く一五九首にのぼっている。しかし「国文学」(三三年四月)と(三三年六月)に、

城あとゝきゝにし岡に古瓦ひろひてをれば雉子なくなり

同じ歌が重複している。したがって、正しくは「国文学」発表歌数は

一五八首といふべきである。また、「明星」に発表した歌と二〇首は重

複している。まずその歌を挙げておこう。

一坪に足らざる裏の菜畑に黄なる蝶とび白き蝶とぶ

去年の夏うせし子のこと思ひ出でて籠に螢を放ちけるかな

岩清水立ち寄り見ればその底に瘦せし我が影老いし松影

移し植えし菊の若苗ねがはくは白き花のみ咲けよとぞ思ふ

秋風に柳散りくるこの夕つくづく恋を止めむと思ひき

法の師に箒を借りてみささぎの桜の落葉我れぞ払はむ

あかつきの星の落ちきて碎けなば君が歌の如きひびき有らむか

遠からず花の使もありぬべし去年の瓢の塵や掃はむ

鯉にとて投げ遣りし駄の力にも立ち分れたる浮草の花

たをり来てわれ手向けぬと亡き人の母にな云ひそ姫百合の花

このゆふべ契りし人を待ちわびて三たびめぐりぬ庭の萩原

磯松を飛び離れたる荒鶯の行方に見ゆる蝦夷の遠山

うつぶきて何をか共に思ふらむ二もと立てる姫百合の花

簪もて深さ量りし少女子の袂に付きぬ春のあわ雪

病める身ははかなきものよ人よりも二十日おくれて衣更せり

濡れながら縁にのぼれる鶏に音なき春の雨を知るかな

我が宿は田端の里にほど近し摘みにも来ませ鈴菜すずしろ

沈みたる銭の数さへ見えにけり地藏立たせる岩の真清水

去年の春隣の翁おきなに我れ聞きてつぎし姫挑花咲きにけり

亀の背に歌書きつけて亡き乳母の放ちし池よ深沢の池

完全に同一作でない作もあるが、重複しているのは二〇首を数える。

これは余り意味ないことであるが、ただ、直文は一つの作品を多くの雑誌に発表し、しかも改作していることが多く、その一例として挙げたわけである。校正になっても、歌文を添作し朱筆を入れ、印刷所を悩ましたのは、当時、尾崎紅葉と並称されたくらいであった。

さて「国文学」の直文短歌は「落合直文集」にすべて収められているだろうか。それを調べてみると、次の三首が収められていない。

明治三四年三月「歌反古」の一首

よびずてにわが名よばすはいつならむ君とひたまへ君がはく君に

明治三五年一月「枕の塵」の二首

ある日家への文のおくに、あまた歌かきてやりしが、その中に

あまりにもきよししづけしおりたちて手をひたし見む山の井の水

すてられし秋の扇を拾ひあげて眺むる人の面やつれたり

この三首が一・二・四首に加えられることになるので、直文歌数は「国文学」発表歌を調べた段階では、総計一一二七首となるのである。三首のうち二首目は「萩之家遺稿」に出ているので、新史料とはいえない。

また、この一首を数えることによって「萩之家遺稿」にあつてまだ数えていない歌は八首から七首ということになる。次に「明治会叢誌」を見てみよう。この雑誌は「明治会」の機関誌で、明治二一年一月第一号を創刊している。直文は、多くの論文や随筆を発表しているが、短歌は、第十八号（明治二三年五月）に一首だけしか載っていない。

朝雉子

朝月夜かすむ野守の垣根道かげふみゆけばきすすなくなり

この歌は「落合直文集」に「野雉子」として収められている。同年同月「東洋学会雑誌」にも発表しているし、その年一月には「しがらみ草紙」第五号にも掲載している。「明治会叢誌」は、短歌に関する点では問題がない。（未完）